



シンと静まり返ったホールの幕が上がり、まるですべての観衆を包み込むかのように、優しい音色を奏で始める…。とても優雅に感じられる管弦楽ですが、息の合った演奏は一昼夜でできるものではありません。

「香川大学医学部管弦楽団」は、その名のとおり医学部の学生を中心とした管弦楽団です。現在、30数名の団員をまとめるのは、部長の及川薫さん（医学科・4年）。及川さん自身は、小さい頃からバイオリンを続けていたことが入団のきっかけといいますが、入団して初めて管弦楽器に触れる、という団員もいるとか。「楽しいと思えることが大切ですから…。それぞれが自分のペースでマスターしていくのが一番だと思いますよ」。しかし、やはり練習はハード。「練習は平日の夜、週2回と土日。月に一度はプロの指揮者の方に指導していただいています。それ以外にも自分のパートは自主練習したり…」。とはいえ、何といても医学部生。練習のほかに勉強もハードなのは？との取材陣の質問に、「うーん、そうですね。でも好きなことだから気分転換にもなるでしょう？」とにっこり。「それに高校までと違って大学の場合は自分の好きな勉強をするので、どちらも苦にはならないです」。

## 完璧な演奏のために、ひとつになって…。 香川大学医学部管弦楽団

現在は7月8日に迫った県民ホールアクトホールで行われる年一回の定期演奏会に向けて猛練習の日々。ゴールデンウィークには3泊4日で合宿も行いました。「合宿中は朝から晩まで、演奏、演奏、演奏。最終日にはふらふらになるくらい。でもそこで一体感が生まれるんですよ」とにかく納得がいく演奏をしてほしい、という及川さん。「ああしろ、こうしろ、というよりも自分自身でいろいろやってもらいたい。もちろんアドバイスはしますけれどね」。練習を続けるうちに、何か見えてくるものがあるはずだから、といいます。「でも、独りよがりではいい音楽は創れない。例えば、パートを受け渡すときに、作曲者は、どう考えて曲を作ったのか、その意図を考えて演奏しなければ、バラバラになっちゃうんです」。ひとりではできないことではない、みんなで一緒に創り上げるもの。だからこそ、誰かがひっぱっていくのではなく、自然に生まれる団結力を大切にしたいとも。

「ぴったりと息の合った演奏を終えた瞬間は、ハードな練習を続けた日々すら忘れてしまうほど」と微笑む及川さん。「OBになっても一緒に演奏するのが夢。そのために私たちがこの伝統を次へと繋げていかなければ…。控えめに、でも力強く話す及川さんの思いとともに、医学部管弦楽団の定期演奏会は、今年、20回目を迎えます。



Kagawa Univ.  
Yacht Club  
香川大学  
ヨット部

### 穏

やかに晴れ渡る海を、帆に当たる風を読みながら、軽快に走りゆくヨット。ロープを手繰るその目は真剣そのものです。日焼けした笑顔がまぶしい「香川大学ヨット部」の活動は、主に大規模のヨットハーバーで行われています。練習は毎週土日。それ以外の日もそれぞれ、自主練習をしているといえます。部員数は現在、12名。「ヨットは、自分の力だけでなく、自然という相手に合わせなければ、うまく操縦できないんです。ターンしたり、スピードを出したりするには、風を読み、それに沿った舵取りをしなければなりません。理論的な知識と感覚を要するスポーツです。そこが魅力であり、難しさですね」主将である藤田亮祐さん（法学部3年）は、ヨットの魅力をそう語ります。「体に直接、風が当たるのもすごく体感速度は速く感じます。実際にも30〜40kmは出ているんですよ」。潮風に乗って沖へと走らせる時には、常に緊張を強いられるものの「上手く乗れた時の充実感のほうが強いのもっと上手くなりたいと思うんですよ」と笑います。



ヨット部は昨年、スナイプ級の1艘が、全国2位となりました。その際、当時の4年生とともに、レースに出、見事2位を勝ち取ったのは、現在部員中唯一の女性である石川奈津美さん（教育学部2年）。ヨット部に入ったのは、「新入生のときに体験会というのがあり、そこで風を感じる事ができる心地よさに惹かれた」から。また、小柄な女性であっても力を技術でカバーできる点も入部した大きな理由とか。「昨年は、先輩のヨットに同乗したという感じで、それほど2位になった実感はないんですが…」とはにかみながら「でも、風を体で感じるあの快感は絶対やった人にしか分からない」と目をキラキラさせて話してくれました。

とはいえ、毎週、早朝から日没まで、ほとんどの休日を練習に当て、大会前にはほとんどの部員が毎日時間があれば練習するというハードさ。「それにね、ヨットは大学所有のものを使わせていただいているんですが、消耗品にお金もかかる。好きじゃないとやれませぬ」と藤田さん。それでも、体験会でその魅力を感じてしまった新入生によって、伝統は受け継がれていきます。今年も夏の大会まであとわずか。風を操るかのように、ターンを決めていく部員たちの表情は、誰もが真剣です。